

# 図書館だより

1991. 4. 5

第13巻 1号

通巻117号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



春の風景 西脇順三郎

## 四月

國田祐作

四月は残酷極まる月だ  
リラの花を死んだ土から生み出し  
追憶に慾情をかきまぜたり  
春の雨で鈍重な草根をふるい起すのだ  
(T. S. エリオット「荒地」より、西脇順三郎訳)

こしは雪が多かった。これを札幌の新潟化現象と呼ぶ人もいる。「裏日本型」と呼んで、ウラとは何事かと叱られた人がいるから、こちらの方が通りやすいかもしれない。

吹雪の卒業式は珍しいことではない。入学式

だって花吹雪ならぬホン吹雪に見舞われたこともある。鯉のぼりが吹雪の中にひるがえっている年もあった。

一日、石狩の原を歩いた。石狩湾から吹き抜ける風は強く冷たい。雪融けの水がサザ波を打つ間に凍っていくさまを見た。とは言え、耳のあたりの風音はハッキリ春を告げているのだ。道ばたの氷の割れ目から、濡れたタテガミのような草が地表をのぞいている。

四月の曇<sup>みぞれ</sup>まじりの雨は新入生諸君にとって手荒い歓迎かもしれないが、君たちの内部をつき動かす得体の知れない力を、人々は復活と呼んできたのである。

(くにた ゆうさく 教養部教授)



# 借りるは易く返すは難し

——返本日は忘れた頃にやってくる

## ……電話作戦

世の中おしなべて「借りる」のは簡単だが「返す」となるとむづかしい。「金」「本」そして「恩」というべきか。

図書館から手続きをすませ意気ようようと立ち去るがそれらの何分の1かは期限通りには、もっと正確には「さいそく」がないと戻らない。

フロントではこうした「督促」に追われている。これには時間がかかる。日中いないとなると「日曜日の電撃作戦」ともなる。

以下は「利用案内」を兼ねた督促風景。

## ……返本日を覚えていない

〈ケース1〉

「いつ返本日で覚えていましたか」と聴くと「……」と応答なし。「忘れていた」か「返本日」を頭に入れていない。これが一番普通のケース。貸し出しの時には「返本日は〇月〇日です」のしおりが挿入される。これをよく見てほしい。「いつ返しますか」ときくと「明日返しに行きます」

しかしこれが守られるのは少ない。

〈ケース2〉

「不幸があって地方に出かけていました。」「病気で休んでいたものですから」

このケースなどは同情する。そんな時は電話で伝えてくれればありがたい。

〈ケース3〉

「試験がくるのもう少しと思って」  
返本日は試験とは無関係に設定されている。又「学校に行く機会がなかったの。」というものもあるがこれも同様だ。

〈ケース4〉

「友人に代って借りてあげたのにまだ返してくれない。」

これは一番いけない。もし相手がなくなってしまうと本人の負担になる。

〈ケース5〉

「引っ越したのでまだみつけない。」  
同情はするものの早く見つけて下さいとしかいいようがない。

〈ケース6〉

「どんな本を借りていましたか」と逆に問われ

る。

「さがしたのですが見つかりません」

これはずいぶんのんびりしている。無くした場合は「同一本返済」となる。

このようにして通じたケースはまだよいものの、電話で通じない場合が多い。

〈ケース7〉

「うちにはそういう人はおりません」

〈ケース8〉

「引っ越していまはいません」

〈ケース9〉

「ただ今ルスにしていますのでツツーの音のあとに伝言して下さい。」

〈ケース10〉

「プッシュホンからおかけの方はお部屋の番号を押して下さい。」

いくらおしても通じない。

〈ケース11〉

「今息子はいません。伝えておきます。」

このケースも多いが実行されることは少ない。

こうしたケースでは「郵便督促」を行い、館内の掲示板に名前をはり出しておく。すると仲間がそれを見て本人に伝えてくれる効果がある。

## ……本は共有の財産だ

とにかく「あの手この手」の「督促作戦」でもなお戻らないケースが出てくる。中には「退学」した人もいるだろう。たしかにいろいろな都合があるにちがいないが、せつかく授業料から買っている共有財産だ。次の利用者のことを考えて早目に返本してもらいたいと願わずにはいられない。

「返本日は災害と同様に忘れた頃にやってくる」ことを心してもらいたいものだ。

## ……心なごむときもある

そんなある日、フロントに女子学生が返本にやって来た。「病気だったものですから。すみませんでした。」と言ってケーキの入った小包を手渡した。こういう時はこちらの方恐縮してしまう。「ありがたい」とも思うのである。

くり返すが返本日は通常「10日間」である。休暇中の貸し出しは「長期」になる。そのあとご用心。「日曜電話作戦」を受けないように。



# 世界(社会)という大きな書物

本間 照光

茶の間のブラウン管がそのままレーダーとなり、標的とされる建物が破壊される。“作戦大成功”と伝えるその目は、レーダーを操作する側におかれていて、標的とされる側にはない。「社会」の破壊そして一発の爆裂が人びとになにをもたすのか、映し出される画面からはなにもみえてはこない。ところが、つくりもののミニチュアのようにみえるどの建物にも、人びとが一度きりの人生をたしかに生きている。

幸いにして、湾岸戦争では、細菌＝化学兵器や核兵器は使用されなかったが、イラクの原子炉が破壊されたのではないかと報道もある。この戦争は、ジェノサイドそして社会の絶滅の危機を通じて、わたしたちの目に、あらためて「社会」とはなにかという問題を提示しているとはいえないだろうか。

実は、経済学や社会科学で問われてきたのは、「社会」がみえなくなる構図に対して、いかにみえるようにするかということ、「社会」観の対立であった。経済学批判が意図したのは、「近代市民『社会』の解剖」、「『社会』の運動法則」の解明である。「社会」をなりたたせている科学＝技術情報・人間の潜勢力(Potenz)を基礎として生産力(Kraft)がなりたっているが、それがなにゆえに社会の疎外力(Macht)となり、はては破壊力(Gewalt)・絶滅力に転化しているのか。本来、人間を人間たらしめる労働・実践・社会的力を、人びとの手にとりもどしていく条件は何か。それを明らかにするのが経済学の課題にほかならなかった。こうしてみると、経済学批判においては、自然とのむすびつき——公害、自然破壊、生態系、戦争やスリーマイル・チェルノブイリ・美浜の原発事故、核燃料サイクルなどの問題もふくめて——が、当然にも解剖される「社会」の対象となってくる。a自然とのよりよきむすびつきなしに、b人びとのよりよきむすびつきがなりたつわけではない。生産力の低水準の上に立つゆがんだ自称 Kommunismus が、「野蛮な(粗野な)共産主義」として、ほかな

らぬマルクスによって批判されたゆえんである。

ところが、これまでの「社会」観では、bの側面(とりわけ生産物や収益の帰属)が主な関心事となり、aの側面は見落されるか、せいぜい副次的に位置づけられるにとどまってきた。手近にある書物や新聞などにあたっていただきたい。自然とのむすびつきをふくめて「社会」を把えているものがあるだろうか。たとえば、「生態系における共生関係を視座に含まない経済理論」「自然対社会とする二分法の世界」を批判する論者においてなお、「自然」と「社会」を対立させたうえでその対立を批判しているのである。

「社会」を人びとのつながりとともに、自然とのむすびつきをふくめて理解してみよう。人間は「社会的存在」であり、「社会的諸関係の総体」であるといわれる。また、「社会的存在が意識を決定する」ともいわれる。もうけの対象となる自然だけが偏愛され、それ以外はじゃまもの扱いされるとき、人間性(ヒューマンネチャー；人間の自然)や人間存在はどのように変わっていくのだろうか。聞きなれ、使いなれているはずのことばたちが、ずいぶんちがったイメージをもって、ふくらんではこないだろうか。

このところ、ブラウン管の標的のむこうに、人びと(「社会的存在」「社会的諸関係の総体」)の死をみぬいた、子どもたちのなかに、おどろくほどの反戦の気運がひろがっている。「世界〔社会〕という大きな書物」(デカルト)にしがみつづけると、この混迷の時代においてなお、「書物の世界」もまた、多くのことを示唆してくれるにちがいない。

ほんま てるみつ 経済学部助教授



# 「統一ドイツ」——その形成と発展に思うこと

山本佐門

冬の東部ドイツは暗くて寒い。マチづくりの遅れがその印象をさらに強くする。しかし目を凝らすと至る所再建作業が進行していることにも気づくであろう。

国民はもちろん政治家、評論家、すべての人々の予想を越えて、急速に進行した「再統一」。それは新たな事態が次の動きを引き起し続けるめまぐるしい展開であった。自国の体制改革を大胆に押し進めようとしたソ連の「ペレストロイカ」路線の登場・進行、その作用の東欧「現存社会主義」諸国への波及。ハンガリー等他の「社会主義国」を経由しての東独国民の大量脱出、東独国内での体制民主化を目指す民衆運動の急激な発展（ライプチヒで30万、東ベルリンで100万人の大集会も実現）。そして間もなく保守的共産党ホーネッカー首相の失脚、「ベルリンの壁」の一瞬の崩壊。しかし「壁崩壊」後の「民主革命」から「国家統一運動」への急激な転換。そしてこの国民世論を、明確な展望を欠きつつ、情緒的に「再統一」の方向へ誘導していったH. コール首相指導の西ドイツ保守・中道連立政権の能動化。初めての自由選挙となった東独国会（人民会議）選での「何よりも再統一」を主張する保守党派の圧勝。それに対しての東独内での民主化徹底論、東独体制強化優先論等の理性的路線の後退。そして両独間の二つの条約（「通貨・経済・社会同盟条約」「両独統一条約」）の締結・実施に基づく国家統一の制度的骨格の確定。この期間は約1年、しかも軍事的侵略、市民の流血を伴うことのない大変動。

何故かとも急激かつ平和裡に再統一が進行したのであるか。東独国民の自由社会復帰の願望の強さ、いやそれ以上に国民の暮らしに直結する東独経済の混乱がある。しかしこのドイツ再統一促進要因の根はもっと深部での、歴史的な事態に求められる。それは恣意的で、権力政治的な国家分裂と、にもかかわらず拡大、進化していった東西両ドイツ間の交流である。東西ドイツという形での国家的分裂は、当時の冷戦体制の激化という超大国の政治的抗争の中で、作為的な、ドイツ国民



ブランデンブルク門、車の混雑  
筆者（東ベルリンにて）

にとっては全く外部から強制されたものであり、民族的にも地域結局的にも、別国家形成の内発的根拠は全くなかった。そして国家的分裂後、さらに「恐るべき国境の壁」形成の後も、人々の交流は絶えることなく続いた。特に60年代末、西独社民党主導政権下の東西協調外交＝「東方外交」進展後、国民の相互訪問、両独貿易の拡大などその結合の度合いは一段と高まった。また西側からの情報、とりわけテレビ・ラジオ電波の事実上の自由化ともいえるべき東独流入の作用も見過ごしえない。私が最初に東独を訪ねた1976年当時すでにライプチヒ市民は西独のテレビ番組を楽しんでおり、西側社会の出来事にも相当精通していた。こうした国民生活の次元に関わる再結合への意欲の強さは、それに対する政治的抑圧の枠が取り除かれれば、一気に統一運動の暴発へと進みかねないほどのエネルギーとなっていたのである。それ故にこの抑圧枠を除去する決定的衝撃力となった「ペレストロイカ」推進者ゴルバチョフへのドイツ人の好印象は強く、「ゴルビーのお陰で我々は再統一できた」というのが東西問わぬドイツの国民的世論である。

統一されたドイツ、面積35.7万km<sup>2</sup>（西24.9万km<sup>2</sup>、東10.8万km<sup>2</sup>）、人口7,800万（西6,200万、東1,600万）、日本よりなお小さな国ながら人口的にはEC国内では群を抜いた存在となった。統一の形式は、11州（Land）から成る西ドイツ（正式



国名ドイツ連邦共和国)への東独の、5州に分離しての加入というものであり、オリンピックで常に名をさせた「ドイツ民主共和国」(DDR)の消滅となった。こうした統一の形式、更に国土、人口の両国差の大きさからして、「統一」ではなく、「吸収合併」「併合」だと主張する人も少なくない。確かに対等合併ではないものの、これほどの国土、国民を平和的に再統合し得たことは現代史上画期的なことである。

16州体制の新生連邦共和国の直面する課題は当然ながら多い。国内的には、国家制度的統一、社会的統一の具体化に伴う諸問題がある。国家制度的には、東独の統治機構、実定法の総西独化が主課題である。首都はベルリンと決まったものの、首都機能——国会、行政府のボンからの移転についてはなお未解決である。両ドイツのレベル差からして、経済・社会生活上の統一推進はさらに難事が多い。モータリゼーションに対応し得ない道路、設備更新の遅れた鉄道、老朽化した住宅群、電話普及率の異常な低さ等東独地域の生活基盤整備の遅れは相当なものである。そしてこの遅れと公害のひどさが結び付いている。東独地域での水、大気汚染状況に驚くべきものがある。冬の東ベルリン、媒煙でくすんだ空、強い刺激臭がこのマチをまず印象付けるものだ。ロマンを誘うエルベの流れも上流の古都ドレスデン付近ですでに汚れ切っている。東独産の大衆車トラバントの排気ガスもすごい。それに老朽化して危険なソ連製の原子力発電所。「40年間社会主義は一体何を建設していたのか」問いただしたくなる。しかし一方こうした環境悪化抑制への決定的転機となったことだけでも、「東独社会主義体制崩壊」の積極的意味があったと判断しえるのである。国営企業体制からの全面的な転換を目指す経済の建直しも大事業である。倒産・閉鎖、西独企業への吸収、自立的整理・再編の三つの可能性があるものの、いずれの場合も大量の解雇者は必至であり、最も望ましい自立的再建の道も、運転資金、経営陣の確保が著しく困難な状況にある。そして東独経済にはなお失業者減少を含めて好転の兆しは見られない。両独の「真の統一」ためには単なる「国家制度的統一」に留まらず、「両国民の生活諸関係の同等化」が必要であり、従って「統一完成」と国内的に判断し得るだけでもなお相当の国民的努力と時間を

要しよう。

対外的には再統一されたドイツとヨーロッパ秩序再編の成り行きとの関わりが重視される。ヨーロッパ地域では「ドイツ再統一」が政治的焦点となる以前には、EC統合の強化、具体的には92年を目標とした域内市場完全統合への具体的試みがどのくらい関心事であり、さらに「社会主義圏」の解体、ヨーロッパ秩序への再統合も考慮され始めていた。また「再統一」に際して、ナチス時代への反省を前提として、強大なドイツが出現することへの自己抑制から、ヨーロッパ全体の中で自らの方向を定めようとする配慮がドイツ指導者から絶えず示されている。従って今後ソ連、東欧圏をも含めたヨーロッパの国家関係の発展と統一ドイツの歩みがどのように関わってゆくかが重大事となろう。その際新生ドイツに求められる役割は、現存「国民国家」的な国境の枠を超えたヨーロッパ諸国民の平和的協調の推進役である。そしてこの協調の進展の先に「ヨーロッパ合衆国」の形成がある。

ドイツ再統一はその過程の第一段階を終えたにすぎない。私の出会った東独の人々は、再統一できた喜びと共に、当面の生活上の不安を一様に口にしていて。しかし数年後にはより豊かでしかも自由な社会で、安定した生活を送りえるという期待感も共有していた。近い将来、社会生活同等化の次元まで「統一」が進み、「ヨーロッパ統合」の中心的役割を果たしている「ドイツ連邦共和国」を再訪出来るものと確信している。

(やまもと さもん 法学部教授)



ベルリン市作成ワッペン  
Hauptstadt = 首都



平成3年1月29日～5月30日まで、下記のテーマで展示中です。  
ぜひ、ご覧ください。

テーマ：「出版編集・造本技術展」～編集から印刷・製本まで～(図書館展示きかくNo.13)

場所：自由閲覧室一階

## 「出版編集・造本技術展」

### 編集から印刷・製本まで

◎出版編集とは？/「図書館だより」の編集過程

原稿→レイアウト(割り付け)→校正

○電算写植から印刷へ/「写真パネル展示」

カラー画像処理システム→印刷プロセス

○「Hokkai-Gakuen since 1885」と

「北海学園大学経済論集」ができるまで

◎「本造り」の技術/製本のしかたと道具・材料

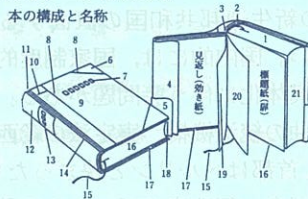
○本の解剖学/構造と形態

☆出版編集・造本技術の本

→図書館1F 自由閲覧室

期間；平成3年1月29日～5月30日

本の構成と名称



1. 天 2. 花ぎれ 3. のど 4. カバー 5. 帯紙 6. 角革  
(カバー) 7. 平の文字 8. みみり 9. 平 10. 平の出  
11. 溝 12. 背 13. 背文字 14. 耳 15. しおり 16. 地(裏下)  
17. ちり 18. 角 19. 見返し(遊び) 20. 遊び紙 21. 小口

図書館展示きかくNo.13

### ○出版プラン作成から編集まで

本づくりが決ったら、以下のようなプランの柱を決めておきます。特に共同作業で進める場合には、編集会議での確認が大切です。

- ① 誰に読んでもらうのか？(読者対象は?)
- ② 何を中心に読んでもらうのか？(何を伝達したいのか?)
- ③ どんな資料や写真を集めるのか?
- ④ どんな大きさの本を、何冊作るのか?
- ⑤ だれが、どの原稿を担当するのか?
- ⑥ どんな順序で記述し、編集するのか?
- ⑦ たて組、よこ組など、どんなレイアウト(割り付け)にするのか?

### ○電算写真から印刷へ

#### 組版(文字組み)システム

入力専用のワードプロセッサで文字を高速で入力します。これをコンピュータでコード変換の上、写植します。

#### 校正

組版(文字組み)の誤りや体裁などを原稿と照合して、校正刷を訂正する作業です。校正は印刷会社で行う場合もありますが、普通、印刷の発注者が行います。

#### 製版・刷版

版下から印刷機に取り付けて印刷するための刷版をつくる作業を製版といいます。製版は版面の構造上の違いから凸版、平版、凹版などに大きく分けられます。

#### 印刷

現在の印刷の主流は、平板のオフセット印刷で

す。オフセット印刷とは、刷版から直接、印刷用紙に印刷せず、ゴムブランケットに一度、版面のインキを付け、用紙へゴムブランケットから転写する方法です。

### ○製本

#### 上製本(本製本)

表紙は普通、原紙や板紙に革や布、紙を貼り合わせて作り(ハードカバー)、本文よりも表紙を大きめに仕上げます。また、背の形で丸背、角背の別があり、普通、糸で本文をかかります。後で述べる並製本(仮製本)に比べて、高級感と丈夫さですぐれています。

#### 並製本(仮製本)

上製本のように厚い紙を使わず、直節薄い紙で本文をはさみ、のりか針金でとじます。一度に仕上げ断裁するのが普通で、本文と表紙の大きさは同じです。

#### 製本とじ方の種類

- ① 無線とじ  
ページの背を接着剤でとじる方法。
- ② 糸かがり  
1折りずつ糸でかかる。高級な本に用いる製本。
- ③ 平とじ  
おもて 表紙から うら 裏表紙まで針金でとじる方法。ページ数のある報告書などに多く使われます。
- ④ 中とじ  
表紙の背から中央の見開きまで、針金でとじる方法。週刊誌などで使われています。



## 気楽に読もう

### 旅立ちの朝に——愛と死を語る往復書簡——

曾野綾子・アルフォンス・デーケン著  
角川書店 1985；新潮文庫 4541

“死”を考えたことはありませんか。

肉親や身近な人々の突然の死に、悲しみのどん底に落され、身の処し方をどうしたら良いか迷う事態が、すぐそこに待っているかも知れません。そんな時、二人の書簡集は、生と死を主題に“死”をいかに、日常的にとらえていけば良いか、生き続ける智恵としての教科書です。“死”すなわち、死をむかえる前の、生きている今、“生”の姿勢を示してくれています。曾野綾子氏はクリスチャンで作家、A.デーケン氏は神父、現在上智大学コミュニティ・カレッジ（夜間市民大学講座）で「死の哲学」の講座を持つ教授です。

まっすぐ死をみつめつつ生きる二人の著者は、精力的に、生き生きと生きている姿を、今も私たちに読者に示してくれています。

### NHK大英博物館 全6巻 NHK取材班編

日本放送出版協会 1990 069 D 15

大英博物館は1753年に創設され、世界中から集められた収蔵品は1,000万点に及ぶといわれます。本シリーズは、メソポタミア、エジプト、ギリシャ、インド、中央アジア、マヤ、アテスカの各文明が生んだ文化遺産や文明の興亡を織りまぜながら、古代文明の謎に迫る歴史紀行です。

誰もが一度は、古代エジプトの不思議に魅せられると思いませんか？ピラミッド・ミイラ・そしてツタンカーメンに代表される王墓の発掘物語、どれも神秘的で妖しげな魅力を持っていると！

そこで第2巻・エジプト・大ファラオの帝国を紹介すると、ファラオとはエジプト王の呼び名で王の住居を表わす「大きな家」の意味をもつ、その中で数々の巨大神殿や多くの遺跡を残したのが、王の中の王『ラムセス二世』である。ラムセス時代を通じて、古代エジプト文明を浮き彫りにすると共に、ロゼッタ・ストーンの謎にもせまっている。

読み終わると『エジプト』に興味を沸くこと受け合い、おすすめの一冊です。

### ニュートン別冊 銀河系の彼方へ

——宇宙のなぞを追う最新天文学——

0991 著者不明 M 星の謎へ 教育社 1990

現代のめざましい天体観測機器の発達と物理学の研究によって解明される宇宙の姿は、知的好奇心を十分満足させてくれました。

生命の存在する星の確率は、宇宙の中で一兆分の一といわれています。地球は、まさにその星なのです。人間は、驚異の存在なのです。だからこそ生命をマクロに考えたいと思います。

仏教に“受け難き人身を受け”という言葉があります。決して望んで生まれてきたわけではないのですが、悠久な宇宙の時の流れの中で、けし粒にも満たない百年の一生は、おのれのためだけに他の生命を奪ったり、自然を蝕む地球の害虫、宇宙の天敵になり下がってはならないのです。この図書のページを追いながら、自然科学の図書なのに人間の存在を考えさせられてしまいました。

### 「僕が戦場で死んだら」

ティム・オブライエン著 中野圭二訳 933 O 14

今年最大の出来事であろう中東での湾岸戦争は、短期間ではあったが、多くの死傷者を出し、当然若い兵士達もその命を落していった。この本のタイトル「僕が戦場で死んだら」を目にして、どの様なことを連想するだろうか。ここでいう戦場とはベトナムのことなのだが、著者はあのベトナム戦争の経験者であり、リアルな状況描写と個性豊かな人物達はそれゆえの産物であろう。かと言ってノンフィクションではなく、戦場シーンばかりでもない。とにかく淡々とした文章が続き、著者の主義主張を押しつけるということもない。タイトルが仮定の言葉である様に、ストーリーも他人事でも語るかの様に冷めた感じで書かれている。戦争というものをどこか対岸の火事を眺めるごとく受け止めてしまいがちな私達にとって、この本はそんな感覚に少し変化を与え、何かを覚まさせてくれるかもしれない。



◆ 経済関係 ◆

- シュマーレンバッハ炎の生涯 M. クルーク著 1990
- 事典アジア・太平洋 総合研究開発機構編 1990
- デタントの成立と変容 R. W. スチーブンスン著 1989
- アメリカ自由主義とニューディール 安藤次男著 1990
- 現代経済学上, 下 L. C. サロー著 1990
- 経済学の盛衰と現実経済 山本誠之著 1990
- ケインズから現代へ 根井雅弘著 1990
- 教養としての経済学 斎藤謹造著 1990
- 富効果と貨幣理論 R. J. スウィーニー著 1990
- 不平等を生み出すもの L. C. サロー著 1984
- 日本経済論 保坂直達著 1990
- 円で見る日本経済 香西泰著 1990
- 軌心情報化経済 牧野信彦著 1990
- どうなるソ連・東欧経済 「経済」編集部編 1990
- 資料・戦後日本の経済政策構想(全3巻) 中村隆英編 1990
- 政策協調の経済学 石井菜穂子著 1990
- EC欧州統合の現在 金丸輝男編著 1990
- 戦間期東南アジアの経済摩擦 杉山伸也著 1990
- 日本資本主義の二重構造 栗原源太著 1989
- 経営統計学 竹内清編 1990
- 「M&A」のABC 勸業角丸経済研究所著 1990
- 企業買収・売却戦略 T. H. ホプキンス著 1987
- M&Aの経済学 佐藤隆三著 1987
- 中小企業の人材確保と活用戦略 中小企業庁指導部指導課 監修 1990
- 中小企業読本 清成忠男著 1990
- 予算管理の基礎知識 小林健吾著 1989
- 財政思想史 坂入長太郎著 1989

◆ 法学関係 ◆

- 現代政治キーワード 石川真澄著 1989
- 現代政治学概説 日下喜一著 1982
- 政治学 森尾忠憲著 1990
- 現代政治学入門 篠原一編 1984
- モンテスキューの政治・法思想 山懸三千雄著 1989
- 公務員の勤務時間・週休二日制・休暇 勤務時間制度研究会編著 1989
- 現代国際事情 原正行編 1990
- 戦争の原因を考える 森利一著 1989
- 国際関係論 大平善悟著 1989
- 現代国際政治 '40s-'80s 柳澤英二郎著 1990
- 20歳の法律ガイド 木村晋介著 1990
- 現代法への招待 本多淳亮著 1990
- 法哲学と実定法学の対話 星野英一編 1989
- 実定法の基礎 石渡哲著 1989
- 著作権概説 半田正夫著 1990
- 近代憲法の成立と自治権思想 河合義和著 1989
- セミナー憲法 田中館照橘著 1990
- 行政法入門 今村成和著 1990
- 現代行政法 成田頼明著 1990
- 行政法概説 総論 杉村敏正編 1988
- 物権法要説 三和一博編 1989
- 家族法論集 泉久雄著 1989
- 現代会社法 河本一郎著 1989
- 刑事政策の問題状況 菊田幸一著 1990
- 死刑と人権 アムネスティ・インターナショナル編 1989
- 裁判について考える 谷口正孝著 1989
- 倒産法体系 霜島甲一著 1990



# 案内

## ◆ 工学 関係 ◆

- 実験のための溶媒ハンドブック 池上四郎編著 1990
- フローインジェクション分析法 黒田六郎著 1990
- インタフェースの認知工学 J. ラスムッセン著 1990
- 光のスピードに迫る 冨家雄著 1990
- 基礎無機固体化学 古山昌三著 1990
- 超音波スペクトロスコーピー 基礎編 和田八三久編 1990
- 電磁回路理論序説 大類浩著 1990
- 電気電子計測 山口次郎編 1990
- ステッピングモータ活用マニュアル 省力と自動化編集部編 1990
- 論理回路シュミレーション 阿部英志著 1990
- 電子デバイス工学 古川静二郎著 1990
- はじめてデジタル回路を学ぶ人のために 永田博義著 1990
- VLSI 計算の諸側面 J. D. ウルマン著 1990
- 自由電子レーザとその応用 電気学会自由電子レーザ調査専門委員会編 1990
- 面発光レーザ 伊賀健一著 1990
- 半導体工学 山口次郎編 1990
- センサ応用回路の設計 松井邦彦著 1990
- 情報処理とコンピュータ概論 大林久人著 1990
- 有機電子材料 斎藤省吾著 1990
- コネクションマシン D. ヒリス著 1990
- シリアル伝送完全マスタ 稲垣完治著 1990
- ワークステーション 前川守編 1990
- フロッピー・ディスク装置のすべて 高橋昇司著 1990
- 人工知能の研究者たち 溝口文雄著 1990
- アルゴリズムとデータ構造 平田富夫著 1990
- 基礎からの映像信号処理 畔津明仁著 1990

## ◆ 教養 関係 ◆

- 情報管理論 梅棹忠夫著 1990
- 読書談義 渡部昇一著 1990
- 書物の時間 芦田宏道著 1989
- 行為と出来事 D. デイヴィッドソン著 1990
- インテレクチュアルズ P. ジョンソン著 1990
- ルイス・キャロルの知的ゲーム L. キャロル著 1987
- 図説現代心理学入門 金城辰夫編 1990
- 社会化の心理学ハンドブック 斎藤耕二編著 1990
- 人間行動の心理学 吉川成司著 1990
- 『アナール』学派と社会史 竹岡敬温著 1990
- 社会の中の人間 原岡一馬編 1990
- 社会調査 宝月誠著 1989
- ドイツ社会主義 B. ラッセル著 1990
- ロシア共産主義 B. ラッセル著 1990
- すまい考今学 西山卯三著 1989
- 現代技術と労働の思想 筆宝康之著 1990
- 生涯学習事典 日本生涯教育学会編 1990
- 柳田国男の思想 梶木剛著 1989
- 中国数学史 銭宝琮編 1990
- 地球の雑学事典 大浜一之著 1990
- 生物学入門 野田春彦著 1990
- 事例解説 見てわかる知的所有権 高木義輝著 1990
- 単位の小辞典 海老原寛著 1990
- しぐさの比較文化 L. プロズナハン著 1988
- 英語の論理・日本語の論理 安藤貞雄著 1986
- 日本語教育ハンドブック 日本語教育学会編 1990
- 英語語源の素描 渡部昇一著 1989
- アメリカン・ピクトベティア 田崎清忠編 1989



## 夢風人 ①

—ロシア大使  
ガリツィン(1720-92)  
のみたモーツァルト—

ロシア語にアイをみる  
愛?眼?

1776年9月、私はドナウを上りをはるかなるアルプスのふもととザルツブルクを訪れた。

すでにモーツァルトは20歳になり青春を謳歌しているはずなのにあまりさえない様子だった。前年1775年に矢次早に作曲した「ヴァイオリン協奏曲」は7曲。モーツァルトはなぜかこの先にもあとにも二度と「ヴァイオリン協奏曲」は作曲しなかった。

察するにそれはコンサートマスターであるはずの彼の上にイタリア人のヴァイオリンニストが招かれたものらしい。

それでも私が彼の家を訪ねるとロシア語の話に興味を示した。

彼は私にたずねた。「ロシア語では『の』をどうあらわすのか」と。それで私は彼に「フランス語やドイツ語とは異なりロシア語は冠詞がないのですべて語尾の母音で表わす。但しロシア語には母音は二系統ありドイツ語の倍になる」と応えると彼はさらに「『haben』(=英語のhave動詞)に当るものはなんですか」ときく。私は「それも同じく『の』で表現するんですよ」と応えた。彼はさらに「完了形はどう表現するんですか」ときくので「ドイツ語のように haben と過去分詞とでは表現せずその語に接頭辞をつけて現わしています」と応えた。

彼はただちにロシア語のなんであるかを理解した。モーツァルトは言った。「ロシア語は愛=АИに満ちていますね」「いや全く天使の言葉ですよ」と。「フランス語では僕なんか「モザール」と言われ最後の「T」の子音は発音されずじまいなのにロシア語で「モーツァルトの」は Моцарта」と a がつき、女性語尾 a が ai になるとは。

彼の言うところによると「『の』をみればその国の言葉がわかる」とも「『の』は口ほどに物を言い」とも語った。

モーツァルトはことばの天才でもあった。英語・フランス語・イタリア語・オランダ語にラテン語を自在にあやつっていたのだ。それに「ボヘミアのことば」と「ロシア語」を加えると7か国語は理解していたことになる。

## もっと 光 を

—没後

楽  
天  
花

時  
芽  
季  
の  
モ  
ー  
ツ  
ァ  
ル  
ト

①

## 世恋花

ぜ れん か

—失意のロマンティック  
街道から

「キラキラ星変奏曲  
K 265」(1778年夏パリ)

1777年3月23日、冷たいみぞれの中をモーツァルトと母はやっとの思いでパリにたどりついた。

老いた母にこたえただろうこの寒さとモーツァルトの世話のために母アンナはついにこの世を去った。7月3日のことである。

絶望のパリの空の下。夜空を見上げるモーツァルト。「キラキラ星変奏曲」はフランス民謡「ああお母さん、あなたにそれを申しましょう」にもとづく「12の変奏曲」の一つだ。

心の沈みを重く表わした「ピアノソナタ K 310」そしてあの「トルコ行進曲付き」の「ピアノソナタ K 331」を作曲した。(実はウィーン時代)

「キラキラ星変奏曲」の中にあるハッとするような激しい音情はのちのモーツァルトの作曲活動の基本ともなったとは言えまいか。

ウィーン時代のモーツァルトの一連のピアノ協奏曲やあの「ピアノソナタ K 545」の主要なモチーフがこの曲にはじまったようにもみえる。

母を失い、職もみつからず、あげくのはてに恋人からも見捨てられたモーツァルトが最後に見出した希望の糸はいとこの「テークラ」であった。

母の代わりに帰路伴ってほしいとこと共に再びザルツブルクに戻ったのは1779年1月15日。それは母と子がザルツブルクを離れた1776年9月23日から2年4ヵ月後のことであった。

青春とは「母を犠牲」にすることなのか。モーツァルトがこのことを知っていたら我々はずっと多くの名曲に出会えただろう。

モーツァルトは母に「それ」を告げることはなかった。「それ」とは「想いを寄せる人」のことである。



# もっと モーツァルトを

200年スペシャル——

# アマテウス 交遊録

① モーツァルト 忘れ得ぬ 人々より

## ルソーとゲーテと

——光と風の時代を生きて——

## ユウフラテスの 知恵

——ピュタゴラスの 徒モーツァルト

① 啓芽<sup>ヒラメキ</sup>季<sup>キ</sup> モーツァルト

# 楽 天 知

「ピュタゴラスの徒」モーツァルトは夢をみる。彼はピュタゴラスにユウフラテスをめざせてと言われる。そこでは書記たちが粘土板に数学の問題を彫り子供たちに解かせているのに出会った。

それは次の様な問題だ。

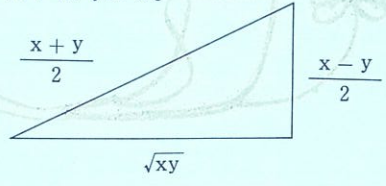
- 「幅と長さがある。  
 ① これを加えると 30  
 ② これを掛けると 40  
 幅と長さはいくらか」

子供たちはそれを次の様に解いた。

- 「① ①を2で割る。  
 ② これを2乗した。  
 ③ これから②を引く。  
 ④ 次にこれを√にする。  
 ⑤ これを①と加えてかつ引く。  
 ⑥ これがその答えである。」

これは何を意味するのか。彼等は近代人のほとんどが答えることの出来ない「方程式とは何か」の問いに簡明にも「ピュタゴラスの定理を解くこと」と答えているわけである。

彼らは次ようなイメージを確立していた。とモーツァルトは考える。



$\frac{x+y}{2}$ と $\frac{x-y}{2}$ の値が求めればおのずからこの2つを加えて引くと各々  $x$ ,  $y$  の値が自然に出てくるというわけである。

モーツァルトが生きた時代は「光と風の時代」つまり、ルソーの「啓蒙思想」とゲーテを中心とする「疾風どとう」の時代であった。

思想家として知られるルソーは「音楽家」でもあった。「むすんでひらいて」はルソーの曲と言われる（『むすんでひらいて考』海老沢敏）。

モーツァルトはルソーのオペラ『村の占師』を見てオペラへの興味を一層かき立てられたようだ。のちの『フィガロの結婚』へとつながっていく。

モーツァルトとルソーは一度も会わなかつたが、ルソーは『エミール』の中で神童モーツァルトについてふれている。

他方モーツァルトはゲーテと一度出会っている。1763年7歳のモーツァルトがフランクフルトで演奏会を開らいた折であった。

モーツァルトはやがてよく知られているゲーテの詩『すみれ』に作曲したがその末尾に「かわいそうなすみれ」とつけ加えたのはあまりにも有名な。

ゲーテの生涯は『ファウスト』との格闘の生涯だったが、モーツァルトのあまりにも早い死をきき、『ファウスト』はモーツァルトによっては作曲されないといつて悲しんだとも言われる。

ゲーテが『ファウスト』を完成させたのは作詩をはじめて60年後の死の年1832年だからモーツァルト没後41年たってからのことである。

ゲーテは死の床の中で「もっと光を」と言ったと伝えられるが音楽をとりわけモーツァルトを愛した彼はそのあとに「もっとモーツァルトを！」とは言わなかつただろうか。





# 省エネ考（その一）

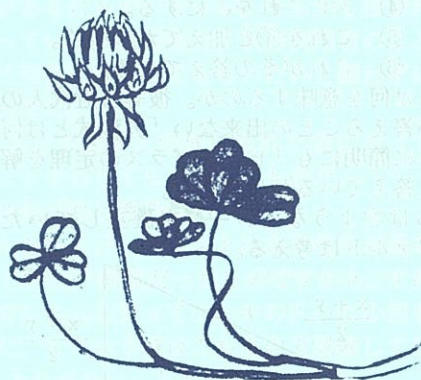
小坂直人

二度にわたる「石油危機」（今回の湾岸戦争は三回目の危機を誘発する可能性があったが、2月28日の停戦以後の処理が順調にいけば、その事態は避けられそうである）を経験することによって、日本人の省エネに対する意識は相当に高められたと思われる。ただ、その場合の省エネの中身は「節エネ」、「節電」という意味合いが強く、これまで使用していたエネルギー量を節約するという所に力点があった。たとえば、暖房温度を下げるといったことから、湯沸器の口火のつけっ放しをやめる、テレビの視聴時間を短縮する、白熱灯を蛍光灯にかえる等といった事柄である。このような、一つ一つは小さなことではあるが、国民全体としてみると、非常に大きなエネルギー節約につながる事柄は多数あり、日本人の生活思想の中にかかなり深く浸透している考え方である。その意味では、元来日本人の生活慣習としては、エネルギーを大量に消費するような生活スタイルはむしろなかったのであり、浪費を非難こそすれ、これを美德とするような考え方は日本人になじまない性格のものであった。したがって、当時の「省エネ・キャンペーン」は抵抗なく国民に受け容れられるところとなったと思われる。

けれども、このような意味での省エネ思考がこれからの世代にも同じように、スムーズに受け容れられるかどうかは疑問である。浪費一般の悪徳性はそれなりに理解されるとしても、ライフスタイルそのものがエネルギー依存型に変わってきており、それは基本的には彼らのせいではないのであり、それを急に換えようとするれば、そこに摩擦が生ずることは避けられない。

こうした事情を考えると、これからの省エネのあり方として、単純な「節減」を一方向的に訴えるという方法ではなく、現在のエネルギー消費水準そのものを落とすことなく、なお省エネを実現するという道の探究が余儀なくされることになる。そして、この道の基本線は既に見えている。第一に、一層効率的な機器の発明・工夫である。電力消費の少ないテレビや冷蔵庫、あるいは燃費の良いエンジンの開発などである。第二に、太陽エネルギーなど、これまで十分活用されてこなかった自然エネルギーの利用を促進することである。第三に、これまではほとんど捨てられてきた廃熱、廃エネルギーの回収利用を拡大することである。第四に、エネルギー消費構造を産業中心型から民生中心型に転換し、ヨーロッパ型の構造を実現することである。次号から、これらの点について順次考えていくことにしよう。

（こさか なおと 経済学部助教授）



北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.13 No.1.(通巻117号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部分室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目  
☎(011)841-1161 本館内線 270~275・279 工学部内線 813・814